



— 会員の自由な投稿のひろば —

カンボジアの教育支援、若い感性と行動力で、第二ステップに

「オークンの会」代表 苔米地純子・中澤麻紀

カンボジア教育支援「オークンの会」の代表、苔米地純子です。「オークン」はクメール（カンボジア）語で「ありがとう」という意味です。群馬に留学していたカンボジア青年との縁で、2004年4月に活動を開始し、最初の活動としては「奨学金制度」をスタートさせました。プティアユーン（子どもの家・孤児院）もその数年後にスタート。「顔が見える活動」を目指して、気が付けば10年という月日がたっていました。11年目からは若いスタッフにバトンタッチ。若い感性と行動力で新たな活動が今から楽しみです。以下、前橋の日本事務所で中心となってくれている若いスタッフ、中澤麻紀さんに語ってもらいましょう。



オークンの会第二ステージのキーパーソンは、早稲田大学に考古学を学びに来ていたチュン・メンホンさん。スタッフと知り合いだったことが縁で、これまでオークンの会の日本事務局によく顔を出してくれていました。昨年、ご家族でカンボジアに帰国することになり、カンボジアで子どもたちの教育支援をしたいと申し出てくれました。そして、メンホンさんと縁の深い、カンボジアの真ん中あたりにあるコンポントム州アツ村で子どもの支援事業がスタートすることになりました。アツ村は1993年に行われたカンボジア総選挙を実施するための国連カンボジア暫定統治機構（UNTAC）の国連ボランティアとして活動していた中田厚仁さんがポルポト派に殺害された地にあり、彼の死後、彼の名前をつけて作られた、日本にゆかりの深い場所です。

この地でまずスタートしたのが、貧しい子どもへの奨学金事業です。農業中心で子どもたちは家のお手伝いをせざるを得ないなど、まだまだ貧しいこの地域。現在7名の子どもたちを支



援し、少額ですが、家事の手伝いを少し休んでも学校に通えるようにしたいと思っています。

また、現在、プティアユーン（みんなの家）という子どもたちの教育の拠点も建設中です。貧しく親のいない子どもを中心に暮らしてもらい、教育の機会を与えるとともに、地域の文化教育の拠点になってほしいと思っています。また、一足先に、プティアユーンには会員のご厚意で井戸が完成し、現在、村の人たちに利用してもらっています。

今後、地域を巻き込み、子どもの初等教育をはじめとした様々な教育の拠点として、また日本とカンボジアの交流の場として地域に根付くように取り組んでいきたいと思っています。

とても心強いのが、同じ地域で活動する早稲田大学のボランティアグループ Ju-Ju とそのOB、OG で構成される The Living with heritage という団体の存在です。毎年、総会に来てくれ交流するとともに、物資の提供などで協力しています。このような若い彼らの知識やエネルギーを借り、また様々な人や世代が協力しながら、カンボジアの子どもと地域を見守り、盛り上げていきたいと思っています。

